

氏 名	北 田 了 介
学 位 の 専 攻 分 野 の 名 称	博 士（経済学）
学 位 記 番 号	甲経第36号（文部科学省への報告番号甲第322号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2010年3月3日
学 位 論 文 題 目	フーコーにおける〈主体化の問い〉としての「倫理」 —権力・統治性・自己への配慮—
論文審査委員	（主査）教授 篠 原 久 （副査）教授 竹 本 洋 教授 藤 井 和 夫 大 田 一 廣（阪南大学教授）

## 論文内容の要旨

本論文の目的は、ミシェル・フーコーの仕事を〈主体化の問い〉にとらえ、その主題を通して明らかにされる彼自身の「思想的ふるまい」を、ひとつの独特な「倫理」的態度として理解することで、フーコー研究に新たな視点を導入しようとするものである。著者はこの作業を、副題に示された内容に沿って、フーコーの「権力」論から、「統治性」論へ、そして〈主体化の問い〉としての「自己への配慮」論として展開しようとする。

著者によればフーコーの主要著作である『狂気の歴史』（1961年）から『言葉と物』（1966年）を経て『監獄の誕生』（1975年）に至るまでの問題関心は、近代における「主体」がどのようにして形成されるかという点にあった。しかしながら、その後のフーコーの仕事は、1980年代に入って大きくその方向を転換させ、自らに配慮し、自らを形成する〈主体化〉の系譜学の探求に向かうことになる。本論文はこの重要な転換点の発端をフーコーのコレージュ・ド・フランスでの1976年講義《社会は防衛しなければならない》に求め、そこからの議論の展開を彼の「思想的ふるまい」に重ねようとする。その展開過程は以下の5章から構成されている。

第1章 「権力」から「統治性」へ

第2章 戦争モデルの限界——戦争モデルと統治性の差異——

第3章 統治性分析におけるエコノミー・ポリティーク論の展開

第4章 主体化をめぐる問い——自己への配慮からパレーシアへ——

第5章 批判としての〈主体化の問い〉

第1章では、1976年講義での「戦争モデル」を通して論じられたフーコーなりの社会論である「権力関係論」が包括的にとらえられるとともに、そこでなされた議論のどの部分がその後の1978年講義（『安全、領土、人口』）と1979年講義（『生政治の誕生』）との主題となる「統治性」分析へと受け継がれていったかが明らかにされる。76年講義の主題は、「支配的な」言説とそれに「抵抗する」形で提示される言説との関係を「諸人種間の闘争」として描くことで、諸力の関係に言説の作用を重ね合わせながら、フーコー独自の権力関係を提示することにあるが、その際にフーコーによって用いられている「人種」(race(s)) という概念は、今

日理解されるような生物学的な文脈を伴ったものとしては用いられておらず、むしろ生物学的な「人種」は、この諸人種（種族）間の闘争というモデルの発展した形で同一「国内」での種別を可能にするために登場したものとされている。この生物学的な人種の登場と併行して、フーコーが導入した新たな概念が「生・権力」（集団としての人間〔＝人口／住民〕の生命に働きかける権力）であって、この権力概念によって、一見すると矛盾した政策態度（一方でナチズムのユダヤ人虐殺に象徴されるような事態と、他方で人口／住民の社会保障を通じた健康増進政策）が理解できることになる。

この「生・権力」概念は、「ポリス」（内政）を扱う1978年講義での「統治性」分析に結びつくものであるが、著者が本章でとくに強調するのはフーコーの1976年講義の「戦争モデル」に見られる特異な「権力関係論」、すなわち、「支配的な」側の歴史言説と、それに「抵抗する」側の歴史言説のせめぎあいである。著者はこれと類比的な関係を78年と79年講義での「統治性」分析においても見出すのであって、それが「統治的理性」（統治性）を駆動させる「導き／反・導き」（「操行／反・操行」（*conduite / contre-conduite*）関係であった。この意味において78年・79年講義は、1976年講義でなされた「権力関係論」の展開として理解することができる。しかしながら、著者が問題とするのは、フーコーがなぜ「権力／抵抗」ではなく、「導き／反・導き」を統治性分析において提示したのか、なぜ戦争概念を用いて権力関係の系譜学を描き出せるという当初の目論見を貫徹させなかったのかという点である。このある意味での議論の「切断」を考察の対象とするのが本章の課題である。

第2章では、1976年講義と78年・79年講義の連続性を踏まえながらも、両者が大きく異なる点が指摘される。戦争モデルの分析は諸力の拮抗とそれぞれの時代の言説態がどのように作用するかを通じて権力関係をとらえようとするものであるが、そこでの記述がフーコーに困難をもたらすことになる。フーコーにとって「権力と抵抗」は不可分のものと考えられているので、彼はつねにこの関係を二元論的な関係として取り上げることを戒めてきた。しかしながら76年講義で記述される「諸人種の闘争」は具体性を求めたがゆえに、「支配的な」側の歴史言説に対抗する者を「実体的な要素」として理解させる余地を生じさせた。そのことの例証になるのがホルトによる批判である。ホルトが取り上げるのは、諸力の歴史言説をめぐる闘争においてフーコーが描き出した「アイデンティティ形成」の問題である。ホルトはこの「アイデンティティ形成」の契機において重要な役割を果たす「他者」に関して、フーコーはヨーロッパ内部の存在者にしか目を向けていないのではないかと批判する。具体的には、「植民地の他者」への無関心、奴隷制度や奴隷貿易がヨーロッパの資本主義に与えた効果、さらにそれがヨーロッパのブルジョワ階級のアイデンティティ形成にもたらした影響についてのフーコーの配慮のなさが批判されるのである。このホルトの批判には「的はずれ」な側面もあるものの、著者が重視するのは、「戦争モデル」におけるフーコーの議論にあっては「対抗知」を紡ぎ出す「われわれ」が「既存のアイデンティティを有した存在」であるという点、すなわち「主体」が安定的な与件として前提されているという点である。換言すれば、『狂気の歴史』以来、一貫して問題にされてきた「主体の構成」という問いがここでは置き去りにされているのではないかという疑問である。著者は「戦争モデル」放棄の一端をこの点に見出すのである。

著者がさらに指摘する問題点は、諸力の対抗関係を具体的に記述したために、フーコーが意図せざる結果として、「支配する者」と「それに抵抗する者」という二項的な図式を浮かび上がらせてしまったことである。彼の権力関係論にならえば、両者は分離不可能なはずである。しかしながら（ノルマン対サクソン、王権対貴族という）具体的な記述を行ったために、この講義で語られる権力関係が二項的図式になりかねなかった。こうした難点を解消するためにフーコーによって導入されたのが、78年講義で展開された統治性の力学としての「導き／反・導き」関係である。これはその言葉の選択過程からも明らかのように、「権力／抵抗」関係をより一元的に記したいというフーコーの意図を反映したものである。ただ他方で、「戦争モデル」にみられる「力関係の不平等性」の強調は、その後の「自己への配慮」という主題を経て議論される「パレー

シア」(真理を語る勇気)の問題系において重要な意味をもつことが著者によって指摘されている。

第3章では、「統治性」概念の分析のもとに展開されたフーコーの「エコノミー・ポリティーク」(économie politique)論が考察の対象となる。フーコーにおける「エコノミー・ポリティーク」(経済学)としてよく知られているのは、『言葉と物』において近代の独自の「エピステーメー」(科学的言説)として提出されたものである。この著作では「科学的言説」が「表象」として特徴づけられる古典主義時代から、それが「人間」として特徴づけられる近代にかけて、経済的なものをめぐる議論が「富の学問」から「経済学」へと変容するという見方が示される。しかし著者は、「エコノミー・ポリティーク」についての議論が『言葉と物』以前にも扱われていたことに注目する。それが彼の最初の主要著作『狂気の歴史』である。『狂気の歴史』の主題は、「狂人」が様々な非理性的存在から分離され、いかにしてそれ独自で分析可能な対象とされるに至ったかを明らかにしたものである。その大きな契機をなすのが17世紀の後半から始まった「大いなる閉じこめの時代」と「非理性」の新たな分離という経験であった。17世紀の後半に「非理性」としてひとまとまりにされた「貧者」は、18世紀後半には「狂人」から分離され、監禁施設から「解放」されていく。その際、この分離過程において重要な「知」として貢献することになるのが「エコノミー・ポリティーク」であった。この「知」の装置は、貧困を「人口」という概念に結びつけ、政治共同体の経済的な豊かさを実現するためにいかに貧者を動員するかという観点から、貧困に新たな認識を付け加えようとするものであった。この「人口」への認識と「エコノミー・ポリティーク」という知の関係性は、統治性をめぐる78年講義ではフーコーの分析の出発点に位置づけられることになる。

「エコノミー・ポリティーク」が権力関係分析において重要な役割をもつのは、この知の枠組みと不可分な関係にある「自由主義」の問題系においてである。この議論が取り上げられる79年講義では、「より少ない統治」としての「自由主義」、および「市場」における「真理」と「自由」という概念が、従来の法権利的な分析枠組みでは理解不可能なものとして描き出される。この法権利的なものではない別のやり方で「権力」(さらには「自由」というものを考えようというフーコーの姿勢は、権力の系譜学の着手以降、一貫したものである。とりわけ統治性分析においては、契約論的なありかたとは違うやり方で「統治の合理性」がフーコーによって記述される。経済学の形成は、「ポリス」を土台とする「国家理性」への「反・操行」としての「市民社会」(および「市場」)の出現と関連づけられる。その意味でこの時期のフーコーの議論が「国家の系譜学」という側面をもつことは否定できない。しかしながら、「統治性」の問いは「政治的」な議論にとどまるものではなかった。著者によれば、78年講義で明らかにされた統治性を駆動させる作用としての「操行／反-操行」(「導き／反-導き」)という一元化された動き、そして79年講義で取り上げられた(市場における)「真理」と「自由」についての従来とは別の考え方、これらは「構成される」主体のみならず、主体の「自律的な」構成の側面を考える上でも重要な要素となる。フーコーが「統治性」概念を、「自己と他者たちの統治」、「自己の自己への関係」をも含む総合的な観点としてとらえることで、「政治」の問題と「倫理」の問題が連結できるといったのは、こうした観点からである。

第4章では、このように統治性分析のなかに包含された〈主体化の問い〉がどのようにして展開されていくのが問題とされる。フーコーにとっての「自己への配慮」を通した主体形成の契機という問題は、「主体の構成」という問題を、これまでの受動的側面からではなく、自律的かつ能動的な側面から明らかにしようというものである。その意味で「自己への配慮」を通した〈主体化の問い〉は、著者によれば、いわゆる「構造主義的な決定論」だとみなされるフーコーの議論への批判に対する反批判という位置づけをもつものである。本章では1982年講義での主題である『主体の解釈学』が取り上げられるが、この分析においてフーコーは、「自己を認識する」哲学とは別の「自己に配慮する」哲学の可能性を明らかにしようとする。このことから導出されるのが、従来の哲学の歴史とは異なる思考の歴史を描こうとするフーコーの試みであり、最晩年の「パレーシア」の主題につらなる視点でもある。

「自己への配慮」の系譜学を通して明らかにされるのは、西洋思想における「真理の分析学」と、カント的な「批判的な問い」という二つの哲学的伝統の存在である。著者によれば、フーコーはこの後者の「哲学」を遂行すべく自らの考古学や系譜学という作業を実践したのであった。つまり、フーコーの仕事の内容は、「真理とは何か」と問うことではなく、「真理のゲーム」のルールを理解するために、分析に「歴史」を導入し、いかに所与の「真理」が歴史的に限定された偶然的なものであるかを暴き出そうとすることであった。フーコー最晩年の問題系である「パレーシア」（真理を語る勇気）は、この自律的な主体化の契機における「真理のゲーム」に具体的な場面（権力関係）を付け加えたものであった。つまり非対称的な権力関係のもとで「真理のゲーム」を発動させることによって、「真理」を語る主体にとって「真理」を語ることが何を意味するのか、またその実践がどのような効果を「語る主体」と「語られた他者」に対して及ぼすのかということが問題とされるのである。こうして「パレーシア」が実践される場面は、真理のゲームと権力関係が交差しあう、「倫理的」な実践の場となる。

第5章では、古代ギリシャ・ローマにおける倫理を主題として扱った最晩年の『性の歴史』第2巻『快楽の活用』および第3巻『自己への配慮』（1984年）と、1960年代の考古学的仕事の代表作である『言葉と物』における倫理の扱い方の比較を通して、両者の分析の違いが検討される。『快楽の活用』では「哲学という営み」そのものが、「異なる仕方でも思索すること」であると宣言される。このような理解は『言葉と物』には存在しなかった。そこでは「異なる仕方でも思索すること」は、近代とその時代を特徴づける「人間」という「超越的かつ経験的な存在」からいかに脱出するかということになってしまう。「倫理」の問題構成そのものが「批判的な作業」として姿をあらわす1980年代の仕事とは違って、『言葉と物』では考古学という方法それ自体が「異なる仕方でも思索すること」になりえなかった。また『言葉と物』は方法論としては「構造主義」の枠内にあった。構造主義では別な思索をすることは、現在とらわれている構造からの脱却であり、当然、「人間」という時代からの脱却は「人間の死」ということになる。そこには歴史性はない。フーコーが1980年代に古典古代へと向かったのは、著者によれば、「近代」では看過されてきた主体と真理の関係を明らかにするためであり、またそこでは「自己への配慮」という形で、「デカルト以後」の自己認識（西洋哲学史の主流）とは異なる思索のあり方が展開される空間的な広がりが存在していたからであった。

## 論文審査結果の要旨

ミシェル・フーコー（Michel Foucault, 1926-1984）はその特異な発想とそれを盛り込む刺激的な用語（造語）とによって、現代社会の政治思想のみならず、社会・文芸思想にも多大な影響力を及ぼしている思想家であるが、本論文は、これらのフーコー思想の「活用」の意義を十分に認めながらも、彼のコレージュ・ド・フランス講義での「権力関係論」から「統治性」論を経て「主体化」論に展開されていく思考過程そのものを内在的にとらえる必要性を強調し、その過程をひとつの独特な「倫理的態度」として理解しようとするものである。

フーコーをめぐる多様な研究のなかで、本論文の貢献は以下の諸点にみいだされる。

第1に、フーコーの「活用」的研究においては、彼の提起した種々のキーワード（「エピステーメー」、「規律権力」、「生-権力」、「生-政治」、「統治性」、「主体化」、「パレーシア」等）が個別的に「現実性」に適用される傾向がみられるのに対して、本論文の著者は、これらの用語の位置づけられ方の相違を加味しつつ、諸用語の展開および継承過程において示された思想の歩みを、フーコーの「思想的ふるまい」として理解したこと。

具体的には、ミクロ的に個人の身体に向かう「規律権力」から、マクロ的な「人口」（住民）の生命管理にかかわる「生-権力」や「生-政治」への移行が、種族間の闘争の展開過程から、生物学的「人種」概念

の登場への移行と関連させられていること、また「統治」概念の多様性から、「自己統治」としての「主体化」の問題が引き出され、その主体と他者との関係場面に「権力の非対称性」を導入することによって「パレーシア」（真実を語る勇氣）の問題に導かれるというプロセスを明らかにしたことである。

第2に、1970年代半ばまでのフーコーの代表作（『狂気の歴史』、『言葉と物』、『監獄の誕生』）の主題である「主体の構成」（受動的側面）と、晩年における（『自己への配慮』での）主題としての「主体の構成」（能動的側面）とに見られるフーコーの関心領域の相違を、コレージュ・ド・フランス講義での議論を克明に追うことによって、その関心の変遷過程として明らかに示したこと。

具体的には、1976年講義（『社会は防衛しなければならない』）でのフーコーの「権力関係論」で展開された「戦争モデル」では、「支配的な歴史言説」に対抗する「反-歴史言説」の担い手が既存の安定的な主体として「前提」され、著者が着目する「主体形成」の課題と矛盾することになり、また支配的な権力と抵抗勢力との関係が、彼の意図に反して二元論的になったため、「主体」をとらえる新たな視点の模索が、それ以降の講義の主題として設定されるに至ったという次第が明らかにされたことである。

第3に、能動的な〈主体化の問い〉に基づく「倫理的ふるまい」という意味が、「従来とは異なる仕方でも思索すること」であるというフーコーの主張に注目することによって、フーコーが古典古代の思想に向かったことと、彼が西洋思想史上の忘れ去られた視点を救い出そうとした理由を明らかにしたこと。

具体的には、この論点は、フーコーの「哲学」および「哲学的営み」の解釈に連なるものであるが、「真理の分析論」と「批判的な問い」という西洋の哲学的伝統の二重性のうち、フーコーが後者の「批判的思考」の立場をとったということ、そして「既存の思考枠組みによって規定されたさまざまな二元論」を脱する試み自体が彼の「倫理的ふるまい」であって、西洋の主流の認識論とは異なる思索のあり方を求めるために、彼が西欧の歴史全体に視野を広げる必要があったということ、著者がフーコーの思考過程を追求することによって明らかにしたことである。

第4に、「権力」と「抵抗」を、従来のように二元論的図式によってではなく、「導き／反-導き（＝どのように導かれないかという、導きの打ち消し）」のように一元論的なものとして（「権力／抵抗」として）把握することにより、「統治性」分析における「エコノミー・ポリティーク」の登場過程を、「国家理性」への「反-導き」の展開としてとらえるフーコーの特異な発想を紹介することにより、経済思想史分野からのフーコーへの関心を高める役割をも果たしていること。

具体的には、まず「ポリス」（重商主義の統治術としての「内政」）を土台とする「国家理性」への「反-導き」として、「市場」の形成と連動する「市民社会」の生成が語られ、次いでその市民社会の「知」の枠組みとしての「エコノミー・ポリティーク」が、「より少なく（効率的に）統治する」体制としての「自由主義」と連動して登場する次第が語られることにより、「市場」そのものが、従来の公正（justice）を問題とする「法陳述」（juridiction）の場から、真理（vérité）が語られる「真理陳述」（véridiction）の場となり、国家理性の時代から「近代的統治性」の時代への移行が、「法権利」に依存する統治的合理性から「エコノミー・ポリティーク」の統治的合理性への移行であることが示されていることである。

以上の4点のメリットを含む本論文は、フーコー研究においてもユニークな位置を占め、とくにその内在的なアプローチは、高く評価されるものである。

しかしながら、本論文には、以下のような不備と不満が認められる。

第1に、本論文の構成に関してであるが、第1章と第2章では76年講義での「戦争モデル」のメリット（「統治性」論への発展性）と限界（「主体形成」の問題点）が指摘され、第4章と第5章では「主体化」をめぐる「倫理」の問題がそれぞれ歴史的展開と方法論の角度から論じられ、その2つの部分を第3章の（「統治性」の展開としての）「エコノミー・ポリティーク」論で結合するという、一見バランスの取れた形になっているが、肝心の第3章の内容的な位置づけが必ずしも明確には示されていない。これはフーコーにおける「経済学」

の捉え方と、著者におけるその評価の問題とも関連するものである。「統治性」からの「経済学」の展開部分はフーコー思想の展開として十分理解可能なものであるが、本論文の主題としての「主体化」（および「自己への配慮」）の問題と、「エコノミー・ポリティーク」の形成過程問題とが著者によって十分には論じられていない。「市場」における「真理」（「真理陳述」）の捉え方の問題としても、この点は著者の今後の重要な課題となろう。

第2に、本論文の主タイトルとしての「フーコーにおける〈主体化の問い〉としての『倫理』」に関するものであるが、著者はフーコーの「倫理的ふるまい」を「批判的な問い」としての「哲学的態度」においてとらえ、その「想源」をカントに求めている。著者の指摘のように、フーコーの博士学位論文（『狂気の歴史』）の副論文が「カント論」でもあり、その影響は大きなものであることは事実であろう。しかし、フーコーのもう一つの「想源」としてのニーチェに関しては本論文ではまったく触れられないまま終わっている。『道徳の系譜』を著し、二元論的な価値評価を問いただし、西洋思想史の書き換えを試みたニーチェのフーコーへの影響に言及することは、「批判的な問い」の観点からも必要であったように思われる。

以上の不備と不満が見出されるものの、フーコーの思想の歩みを、主として「コレージュ・ド・フランス」1976年講義の「戦争モデル」以降の「統治」概念をめぐる「思想的ふるまい」として、彼の最晩年にいたるまで内在的に追ったものとしての本論文は、フーコーの研究史における重要な貢献として高く評価される。

以上、本審査委員会は、本論文の内容を慎重に審査し、2010年2月23日に口頭試問を行った結果、北田氏の論文が博士学位（経済学）を授与するに値するものと評価したので、ここにその旨報告する。